

5月13日神田明神の祭、行列に追いついたのは岩本町あたりでした。大通りを各町内30余りの神輿が、氏子町内若衆に守られて大群集の中を行く様はさすが神田大明神の祭りとは他では経験できない感動を覚えました。

この日カメラを持たずに来た私はあわてて走り回り、使い捨てカメラを探しました。

かつてどこの町内にもあった『富士フィルム』の青旗やオレンジ色のコダックの旗が何本もはためいていたものですが、旗は一本も見つからず『秋葉原駅』のキオスクでやっと見つけて後戻りして写真を撮りました。

今はデジカメや携帯で取れるのでカメラもフィルムも入らない時代となって、富士フィルムの工場があった静岡県内の某市は、百億円あった税収は一億円となって大打撃だと聞いております。

ところが台湾の写真館に日本人女性が殺到しているという日経ビジネスの記事を見て調べてみました。台北市の中山北路の目抜き通りに『ウェディングストリート』と呼ばれる結婚式のウェディングドレス、装身具と専門に販売する界隈に写真館が軒を連ね始めて、最近では2百件数えるようになり、この写真館をお目当てに日本の女性が殺到しているとのことでした。

台湾には婚前撮影という風習があって新郎夫婦がスタイリストやカメラマンに依頼してスタジオや公園等でプロ顔負けのメイク、髪型、豪華な衣装で撮影してポスターや写真集として親戚や友人に配る風習があります。この方法を日本人女性に紹介したところ、日本女性達から『本当にこの女（ひと）私なの?!』と歓声が上がって、わざわざ航空運賃4万円程を支払って台湾へとこの写真集を作る目的で行く女性が大変多くなっているとのことでした。

木更津の友人、野口さんが似たような写真館を開いていますので早速聞いてみましたら…

『実は私も十年前、台湾へ何回か渡航取材して、日本の気風に合うように工夫して、新しい形の写真館を経営させてもらっています。ブライダル写真も大衆性と独自性をあわせ考えたり、写真による「自分史」を作るとか、今は常にこの業界の危機感を持って、これからまだまだ…という気持ちを持って、未来投資にも積極的に取り組んでいます。』

新しい市場としてこの方法は海を渡って中国へと受け継がれております。

共産国家中国は神前結婚を否定しておりますので、せめて写真によって結婚、自分史を写真によって記念として残したいという若い人たちの思いがあるようです…』と野口さんは答えてくれました。

台湾の撮影には専属カメラマン2人がかりですので、1日の撮影は8人まで、1人の撮影時間は半日1人2万円から枚数、箇所によって10万円までだそうです。

日本でもいかがですか？

この場合もカメラマンとスタイリストと衣料店等3者以上が協同してひとつの市場を作っていく考えを持ってもらえれば、より町内の活性化へと連動してくれると思うのですが…。